

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 笠原賢介

笠原賢介氏の「ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニッゲ、レッシング、ヘルダーを中心に」は、十八世紀ドイツの思想家たちが「啓蒙」という文脈の中で、非ヨーロッパをどのように捉え、自らの社会や歴史について省察したのかという視点から、ドイツの「啓蒙」の従来の理解を問い直し、新たな側面に光を当てた労作である。

本論文は、ドイツの啓蒙思想家の代表レッシングを中心に扱い、その背景として、当時すでに啓蒙の著作家として著名であったクニッゲを論じ、さらに啓蒙の批判者とされるヘルダーについて考察している。そうしてレッシングに結実した非ヨーロッパ世界の理解が、どのような歴史的文脈にあるのかを示す。十八世紀は啓蒙の時代と言われ、科学技術や技術的合理性を礼賛したとして批判されるが、ドイツにおいては 1960 年代以降このような理解は見直され、新たな見方が提示されている。本論考は、これらの成果を踏まえつつ、新たな貢献をしようとするものである。全体は序論と本論三章、結語からなる。序論では先行研究の検討がなされ、本論文の独自性と位置づけが示される。本論の三つの章の概略は以下のとおりである。

第 1 章においては、主にクニッゲが取り上げられ、ドイツの啓蒙が「社交性」という観点から考察される。この「社交性」は、もともとフランス宮廷を範として受容されるが、十八世紀後半に批判されるようになる。だがクニッゲの趣旨は、社交性一般の否定ではなく、それを宮廷社会に限定されたものから、より広く、多様な人たちとの交流へと自らを開いていこうとする志向にある。そしてカントにおける啓蒙もこの観点から考察され、異なる世界への開放性の内に人間の本質を捉える動きを啓蒙の重要な一側面として取り出す。

第 2 章では、レッシングの啓蒙思想について、『カルダーヌス弁護』と『賢者ナータン』におけるイスラーム観を手掛かりに考察される。まず『カルダーヌス弁護』において、レッシングはイスラームに関する認識の当時の進展を踏まえ、イスラームを偽宗教とするベールの『歴史批評辞典』に見られる伝統的なイスラーム観を批判・転換している点がとくに重要である。こうしてこの書では、宗教の複数性がテーマとなっているが、続く『アダム・ノイザー』においては、対立する宗教やヨーロッパと非ヨーロッパの境界を越えた人々の交流というモチーフへ接続している。そしてそれがさらに後の『賢者ナータン』に結実していることが示される。この作品は、聖地エルサレムの争奪を核とする錯綜した人間関係が織りなす劇であるが、そこでレッシングは、イスラームのみならず、一神教的世界の外部にある異教徒の領域を視野に収め、非ヨーロッパ世界をも描いている。そこではまた、ヨーロッパ啓蒙の社交性の場が重要な役割を果たしている。

第3章ではヘルダーの主著『人類歴史哲学考』（以下『イデーネ』）に即して、彼の非ヨーロッパへの視点、それと連関するヨーロッパへの省察、両者を支える基本的視点が設定され、ヘルダーとレッシングとの連続性が示される。まず『イデーネ』の基本的テーマの一つとして、ヨーロッパ中心主義批判が取り上げられ、「幸福」や「文化」のみならず「啓蒙」に関してもヨーロッパからの脱中心化が行なわれ、文化の多様性が承認されているとしている。とくにイスラームとの関連でヘルダーは、ヨーロッパの形成にキリスト教が果たした役割を評価しつつも、十字軍を含め中世から近世にかけてのキリスト教の歴史を批判し、逆にイスラーム圏の学問と文学が果たした役割を重視している。そこで筆者は、第1章で確認した、社会的存在としての人間観をヘルダーが共有していることを指摘している。最後に、哲学者カントはヘルダーの『イデーネ』を厳しく批判したが、笠原氏によれば、そこには誤解もあり、むしろ思考の自主性、自他の複数主義、社会一般への社交性、人類規模の交際といった理念は共有しているという。

このように本論考は、科学的合理性から啓蒙を捉え、批判的に見る立場に対して、最新の研究状況と資料を踏まえて、交際や社交性、および非ヨーロッパの積極的理解とそこから可能になるヨーロッパへの批判的眼差しといった自己の開放性と相対性を、啓蒙の重要な側面として浮かび上がらせた。こうして進歩史観から安易に批判されるべきでない啓蒙の意義と課題は、今日の我々も正面から受け止めるべきである、というのが笠原氏の最後の主張である。

以上のような本論に対し、審査員からはドイツ啓蒙という重要かつ大きなテーマについて、様々な資料を丁寧に押さえ、時間をかけて周到に仕上げられた、成熟した研究であり、またこのテーマを非ヨーロッパ、とくにイスラームとの関わりという視点から論じた点、思想的にも、社交性というこれまであまり光を当てられてこなかった側面から啓蒙を論じたという点で画期的であるとの高い評価がなされた。とりわけ、多義的で複雑な当時のテクスト群を綿密に読み解いている点、文献学的にも新たな発見を多く含む点で、きわめて高い価値を有するというのが審査委員全員の一致した見解である。

質疑応答では審査委員から、交際、社交性、文化の他者や多様性など重要な事柄について、概念的説明は綿密でも、どのようなことを考えているのか、やや具体性に欠けるとか、上記の3人の作家以外にも様々な思想家、知識人を扱っている分、個々の判断・評価に若干単純化されたところが散見されるといった指摘、質問がなされた。しかしこうした疑問に対しても、質疑応答の中で笠原氏から十分かつ説得的な説明があった。

全体として、笠原氏の学識とその研究の成熟度から、質疑応答も非常に充実したものとなった。以上のことから本審査委員会は、笠原賢介氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。